

## 選評

横尾 拓真

池大雅筆「榆枋園図巻」(大徳寺蔵)について ―中国園林文化の受容と展開―

横尾拓真氏の論文は池大雅の作品、「榆枋園図巻」を取り上げ、画題及び画面形式、作品の制作にいたる構想を、中国の園林画の系譜に位置付け、特に、明代蘇州で制作された手巻作品が強く意識されていることを論証している。池大雅が中国の明清絵画から多くの影響を受けていることは、中国の文人たちの思い描いた理想郷の表現が大きなテーマであった文人画家の立場からすれば自明とも言える。しかし、従来の論考では、『芥子園画伝』など画譜類の影響や、皴法や線描など技法上の共通点などを指摘するに留まり、本論文のように、作品の構想まで含み、しかも、単なる明清画ではなく、より限定的に明代蘇州で制作された園林画との関係を指摘するものは少ない。

横尾氏は広い視野から、慎重に手順を踏んで論考を積み重ねている。まず、「榆枋園図巻」の跋文が安永二年(一七七三)一月から続けて書かれていることから、大雅が五十歳にいたる安永元年頃の最晩年の作品であること、依頼者である巖垣龍溪の住居を描いた作品であることを踏まえ、龍溪及び龍溪と交流のあった知識人たちの資料をもとに、本作品が漢詩文の深い教養をもとに制作されたことを明らかにしている。このような制作背景は大雅の絵画表現を方向付け、大雅は跋文に記される通りに、榆枋園の建物の位置関係を写している。濃厚な中国趣味と榆枋園の実景的表現を反映させることが大雅に求められたことがわかる。次に、さらに視野を広げ、中国の私邸を描いた園林画、園林をめぐる文化が古くから日本にもたらされ、作品が制作された当時、富裕な教養を備えた京阪の文人たちの間では、私邸において様々な文化的な営みが行われていたことを紹介している。このような私邸は中国趣味によって理想化されて造営されていることは言うまでもない。本作品も同様の文化的な時代背景のもとで制作されたことになるが、跋文をとまなう卷子本に仕立てられていることから、特に、蘇州の園林画の一類型の画面形式が踏襲されていること、宝暦十三年(一七六三)度朝鮮通信使の書記、成大中の依頼を受けて制作された「兼葭堂雅集図」に先例が認められることを指摘している。以上が前半に当たり、ほぼ論文の骨子が示されている。この後、大雅作品に見られる蘇州の園林画の受容について検討が加えられている。大雅の数点の作品を取り上げ、蘇州の園林画と比較しているが、その影響は画題に留まり、本作品も含めて絵画表現上の類似性はさほど認められない。筆者はその理由を、依頼者である巖垣龍溪の榆枋園の実景的表現を求める意向など、再び制作背景に立ち戻って検討し、むしろ、類似性が認められない点に晩年にいたった大雅の絵画様式が反映されていると解釈している。筆者は結論として、本作品を「最晩年における五十歳の大雅が、今までの経験を活かしながら、中国絵画の受容と日本における創造的展開を達成した作品」と位置付け、最後の結語において、論文全体の論旨を総括的にまとめている。

本作品が蘇州の園林画を意識して制作されたという前半の記述は充実しているが、後半の大雅作品における意義の説明は十分とは必ずしも言えない。つまり、本作品の画題論としては説得力があるが、大雅の絵画様式に展開するには、まだまだ検討すべき問題を残している。筆者自身、この問題点を自覚しており、現段階で早急に結論を出す必要はなく、今後、研究を進めることを期待する。中国の園林文化の受容は、大雅だけではなく、日本の文人画の評価に関わる大きな問題であり、本論文は文人画研究における新しい視点を提示している。日本だけではなく、広く東アジアを視野に入れた論述は意欲的であ

り、大雅研究をより深めるために必要な成果を示していると思われる。

以上の理由により、横尾拓真氏に『美術史』論文賞を授与し、その功績を称える。